
言葉のない国

I ?love?book

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

言葉のない国

【著者名】

IZUMI

【作者名】

I?love?book

【あらすじ】

おばあさんが言った。

「いいかい、今から話す事はこの国に伝わる古い伝説だよ。」

「昔々、この国にはまだ言葉や文字がなく、人々は自分の気持ちを伝えることができなかつた……

おばあさんが言った。

「いいかい、今から話す事はこの国に伝わる古い伝説だよ。」

「昔々、この国にはまだ言葉や文字がなく、人々は自分の気持ちを伝えることができなかつた…。」

「ある日、2人の旅人がこの「言葉のない国」にやつてきた。1人は大きな男で、もう1人はスタイルが良い女だつた。大きな鞄を1人ずつ持つていて、こんな話をしていたんだ。

男『おい、この国は噂通り言葉がないんだな。』

女『ホント不思議ねえ、リク。』

男『そうだな、アイ。』

人々は聞いた事のない音を聞いてとつてもビッククリしたそうだ。でもね、リクとアイの話は止む事がなく、人々はどんどんパニックになつていつたんだ。

人々の様子に気付いた2人は、

リク『なあ、アイ。もしかしたらこここの國の人達は俺らを嫌つてないか?』

アイ『違うわよ。この國の人達は言葉というものを聞いたことがないから

　　ただ、戸惑つているだけよ。』

リク『そうか…。』

アイ『だから、そんな気にしなくてもいいのよ?』

リク『ああ。』

と言い、しばりく無言になつた…。

沈黙を破り、話し始めたのはアイだつた。

アイ『何考へてるの？』リク。』

リク『ん、ああ。どうすればこの国を変えられるかなぁ…って。』

アイ『なあ～んだ。そんな事考へてたの？』

リク『そんな事つてなんだよ！』

アイ『まあまあ、落ち着いて。』

リク『フンッ！』

アイ『これは私の考へなんだけど、この国を変えるには
ここにいる人達に言葉を教えればいいのよ。』

リク『…。どうやつて？』

アイ『ん～…。たとえば、ジオスチャーでみんなを集めて
学校みたいに1から教えるとか？』

リク『…一応やつてみるか。』

アイ『でも今日はもう口が落ち始めているから、明日実行しまし
ょう。』

リク『そうだな、じゃあ今日は寝床を探そ。』

アイ『…野宿は嫌よ。』

リク『そんな事言つても、言葉がなかつたら泊めてもらひつつのは無
理だらう。』

アイ『そうだけど…。』

リク『じゃあ、ベンチの上ならいいだらう。』

アイ『それならいい。』

そして2人は、道のそばにあつたベンチの上で1日目を終了し
た。』

～2日目～

「そして2日目、リクとアイはベンチの上で目を覚ました。
：国の人々に見つめられながら。

つまり、2人は日が高く昇ったころに目を覚ましたんだ。

リク『何で俺たちの周りに人が集まっているんだ？』

アイ『さあ？』

リク『俺たちが珍しいからかな？』

アイ『たぶん、そういうじゃない？』

でもこれだけ人が集まつていれば、学校が開けるわね。ひら

リク『ああ、そうだな。』

アイ『じゃあ早速始めましょうか！』

リク『おー！』

突然、大きな音がしたので人々の中には逃げ出してしまった人がいた。

残った人たちも2人に寄りしつはしなかつた。

リク&アイ『……。』

アイ『大声出しそぎちゃった？』

リク『たぶん……。』

アイ『学校開けるかしら？』

リク『やれるだけのことはしてみよう。』

アイ『そうね。』

2人はまずベンチから立ち上がり、『こちらに敵意はない。』と
ジェスチャーで伝えた。

人々は最初は頭を傾げたが、少し時間をおいてから分かったような態度を示したんだ。

その後、リクが

リク『僕たちはみなさんに言葉を教えるのです。』

と言つたが、人々には伝わらなかつた。

「アイン言葉を教えることで大変ね。」

アイ『あ！』

リケ『何かいい考えがあるのか?』

『なるほど』。

「アイ『やつやくわく』してみましょー!」

リケン了解

そう言ってリクとアイは自分達の鞄からアランペットとフルートを取りだした。

みんな不思議そうに近づいてきて2人の周りに集まつた。

アイ『じやあ、いくわよ』

- ๑๖ -

アイ&リク『せーの！』

アイ&リク『

?

2人はとても美しい音色で國中を満たしたんだ。
人々は初めて聞く美しい音に聞き入つていた。

やがて音楽が終わると、盛大な拍手が起こつた。

リク『どうやら、大成功みたいだな。』

アイ『やつたー！』

リク『嬉しそうだな、アイ。』

アイ『ええ、もちろんよ。 リクは嬉しくないの？』

リク『もちろん嬉しいさ！』

アイ『それは良かつた。』

で、これからどうする？』

リク『そうだな、この国の人達は音楽が好きな様子だから…』

アイ『音楽を教えながら、言葉も教える！ … でしょ？』

リク『俺が言おうと思ってたのに…。』

アイ『まあまあ、いいじゃない』

リク『ハーア…。』

アイ『じゃあ、他の楽器も出しましょ！』

リク『そうだな。』

2人は鞄から クラリネット・ホルン・ユーホ・トロンボーン・アルトサックス などなど
色々な楽器を出し、人々に見せた。

人々は色々な物が入っている鞄に興味を示した。
それに気付いたリクは、ゆっくりと

『かばん』

と発音した。

人々の中の1人は

『か、か、ばあ、う？』

と言つた。

リク『！　アイ！　今この人が…！』

アイ『？』

リク『喋つたんだ！』

アイ『えつ、嘘！』

リク『うそじやないよ…』

アイ『やつたわね！　リク！』

リク『ああ！』

そうしてリクとアイは1日中人々が興味を示した物の名前を教えていったんだ。

日が暮れてきて、辺りが暗くなる頃にはヘトヘトになっていた。

リク『今日は疲れたな。』

アイ『そうね。　本当に疲れた…。』

リク『…寝るか。』

アイ『ええ。　おやすみなさい、リク。』

リク『おやすみ、アイ。』

…2日目もまたベンチの上で眠りに落ちた。

～3日目～

「そして3日目の朝。

リクとアイは人々に 「あいさつ」 や 「気持ち」 など、昨日教えていなかつた言葉を熱心に教えていた。

リク『アイ、この国の人達は物覚えが早いな。

アイ『ホント教えがいがあるわ。』

リク『そうだな。』

アイ『この様子なら明後日ぐらいにはこの国とお別れね..。』

リク『明後日！？ 早すぎないか？』

アイ『だつて、あまり長くここに居すぎたら別れが辛くなるじゃ
ない。』

リク『..。』

アイ『私だつてここから離れるのは寂しいわよ。 でも.. でも

！』

リク『分かつた、じゃあ明後日までにいっぴい思い出作ろう！』

アイ『…うん。』

そうして2人は、また人々に言葉を教えていった。
人々はそれを興味津々に聞いていた。

そうして言葉を教えてもらった人達は

『 みんな リクとアイ お礼 したい。 』

と言つたんだ。

それを聞いた2人は

『 ようひんで！ 』

『 ようひんで！ 』

そう声をそろえて返した。
人々は

『 準備 する。 明日 まで 待つて？ 』

と言つたので

リクとアイは『 いいよ。 』と返した。

人々は嬉しそうに肯き、さっそく準備を始めようとしていた。

アイ『 ねえリク。 この国の人達は優しいわね。 』

リク『 そうだな。 』

アイ『 それで、私いいこと思いついたんだけど…。 』

リク『 ん？ 何だ？ 』

アイ『 あのね、私たち言葉は教えたけど

この国や人々に名前をつけてないじゃない。 』

リク『 そういえば、そうだな。 』

アイ『 だから、お礼をしてもらつた後に

みんなに名前をつけようと思うんだけど… どうかな？ 』

リク『 いいと思う。 僕も手伝つよ。 』

アイ『 ありがとう…。 』

リク『 ジゃあまずは国の名前を決めないとな。 』

アイ『 そうね…。 言葉に関してたほうがいいんじゃない？ 』

リク『 ああ、それじゃあ 言葉の国 っていうのはどうかな？ 』

アイ『 そのままね（笑） 』

リク『 でもいいと思わないか？ 』

アイ『 うん。 そのままだけど、シンプルでいいと思うわ。 』

リク『じゃあ決定ー!』

そうして国の名前を決めた2人は
一番積極的に話しかけてきた女の子には「セツ」
7歳ぐらいの双子には「リア」と「イク」
国の長老には「チヨウ」など、特徴から名前をつけていった。
いつのまにか田が落ちて、あたりが真っ暗になると
2人は昨日までと同じように、またベンチの上で眠りにおちたんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3773z/>

言葉のない国

2011年12月21日18時50分発行